

『源氏物語』 宇治十帖における橋姫

—— 宇治の三姉妹と橋姫伝承の残映 ——

山 崎 鈴 果

はじめに

『源氏物語』において、宇治十帖の舞台が宇治に設定されており、作中に『古今和歌集』に詠まれた「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」の歌を引いて宇治の姫君たちを「橋姫」と例えている。宇治十帖の物語の展開には、あたかも通奏低音のように、宇治という土地空間のイメージと、宇治の「橋姫」にまつわる伝承（物語）の世界が存在しており、相互間の影響がすでに推測されている¹⁾。

宇治十帖の第一帖を「橋姫」と名づけたことはまことに暗示的である。それは京を離れて宇治という別世界に入っ

て行く「渡し」の橋であり、しかもそこに住む姫君たちの運命をほのかに表している。「我を待つらむ宇治の橋姫」は、いうまでもなく宇治の大君のことであり、中君のことであり、後には浮舟の身の上ともなつて、ここでは橋姫は橋神ではなく人間の世界に降りてきている。はやく北川忠彦氏は、このように明察している²⁾。

「さむしろに」詠は、男性がいとしい女性を思い、会いに行けないことを嘆く気持ちを詠んだと解釈される歌である。この歌から導かれる男女の思いが交錯する世界のイメージを、『源氏物語』作者は「宇治十帖」の構想や宇治の三姉妹（大君・中の君・浮舟）をはじめとする登場人物の役割付けに用いたのではないか。同時に読者である、『源氏物語』作者と

同時代に生きた人々が抱いていた「橋姫」イメージをも物語の前提としてふまえていたであろうことは、容易に想像できる。

しかし、『源氏物語』作者の生きた時代において「橋姫」にまつわる伝承（物語）がどのような内容のものとして人々に受け入れられ、広まっていたのかを直接に知るのには極めて困難である。そのような困難を解決すべくヒントとなったのが渡瀬淳子氏の論文「剣巻」の「創作」態度 宇治の橋姫を巡って³⁾である。渡瀬氏は古今集注釈書にみられる橋姫説話の検討を経たうえで、『剣巻』においては橋姫が鬼女と化した姿で描かれていることの特異性を指摘し、そこから見えてくる南北朝期とされる『剣巻』成立時において「創作」されていた「橋姫」フォルムの変化の道筋を考察している。「橋姫」に関する伝承（物語）は『奥義抄』『袖中抄』『顕注密勘』『古今集延五記』などの『古今和歌集』注釈書に見られる。しかし、これらと比較して『源氏物語』作者の時代までさかのぼって検討すべき、『古今和歌集』以前の「橋姫」像を示した文献は、現在では見当たらない。そこで本稿においては、古今集注釈書における「さむしろに」詠注釈を用い

た、北川氏、渡瀬氏の研究を導きの糸としつつ、「橋姫」詠に対する諸注釈書に引用された「橋姫」にまつわる実に多様な伝承（物語）が、起源や発想においては多元的でありながらも、語られる場においては重層的な装いを以て立ち現われ、歴史を通じて繰り返し継承されていることを確認する。

本稿は、このような作業に基づいて『源氏物語』宇治十帖の三姉妹に対する「橋姫」伝承（物語）の関りのありようを推定し、「橋姫物語」として宇治十帖を読み解こうとする試みである。

第一章 『古今和歌集』における宇治の橋姫

宇治の橋姫の原初的性格は、宇治の橋守と考えられる。宇治橋架橋の後は橋が交通・軍事上の要衝であり他界への通路としても表象されたことから、橋を守護する神になった。宇治の橋姫は現存する文献の中では『古今和歌集』にはじめて登場する。ここで宇治の橋姫は「待つ女」として詠われたことよって、王朝貴族の好尚に合致し、世間に広く知られることになったとみられている。⁴⁾

『古今和歌集』には、宇治橋について詠まれた次の三首（いずれも読み人知らず）が所収されている。

（引用と訳は、『新編日本古典文学全集』小学館による）

狭筵さむしろに衣片敷ころもかたしきこよひもや我われを待まちつらむ宇治うぢの橋姫

筵の上に自分の衣だけを敷き、独り寝をして今夜も私の訪れを寂しく待っているのだろう。宇治の橋姫は。

（巻十四・恋四・六八九）

忘らるる身を宇治橋うぢはしのなか絶たえて人もかよはぬ年ぞ経へにける

人に忘れられた身はつらいものであるが、真ん中でできた宇治橋を誰も渡らないように、縁の切れた二人の間には誰も訪れることなく、私は独りで、むなしく年月ばかりが経ってしまった。

（巻十五・恋五・八二五）

ちはやぶる宇治うぢの橋守はしもり女なれをしぞあはれとは思ふ年の経へれば

宇治橋の橋守さん、私は特にお前に親しみを感じるよ。

私と知り合ってからでも、ずいぶん年月が経ったからねえ。

（巻十七・雑上・九〇四）

「さむしろに」詠は寂しく男の来訪を待ち続ける女を都にいる男が思い、会いに行けないことを嘆いた歌である。「さむしろ」には「寒し」が、「橋」には「愛し」（はし＝いとしい）（「端」都に對しての鄙）の意がかけられている。

「わすらるる」詠は宇治橋の中絶えに例えて、女が男に顧みられなくなつた諦念を詠んだ歌である。「中たえて」「中」には、男女の「仲」がかけられている。

「ちはやぶる宇治の橋守」の歌初句「ちはやぶる」とは、神または広く神に関わりのあるものを導く枕詞である。柳田國男は「橋姫といふのは、大昔我々の祖先が街道の橋の袂に祀つてゐた美しい女神のことである」と述べている。⁵⁾この歌

においては「ちはやぶる宇治の橋守」とは、柳田がいう「美しい女神」の年を経た姿と解くことができるだろう。これを踏まえて私訳を次に示しておく。

宇治橋の守り神、貴女あなたのことがいとおしく思われる。ここまで随分と歳月を経たのだから。

原田敦子氏は、『奥義抄』や『袖中抄』などを検討し、橋姫伝承の原初形態を「水神とそれに奉仕する巫女との神婚説話」や、水辺生活者の伝承であるとし、「水死した男と帰らぬ夫を待つ妻の哀話」に求め、それらが結合して橋姫伝承になったという。また、『古今和歌集』所収の三首は、本来それぞれに独立したものであったが、「さむしろに」詠が男の訪れを待つ女を詠んだものであるところから、橋の「中絶え」と男女の「仲絶え」を詠んだ「わすらるる」詠の歌が結び合わされて、訪れの絶えた男を待つ女の像がイメージされ、さらに「ちはやぶる宇治の橋守」詠における橋守の歌の時間の経過の観念がこれに加わり、来ぬ男を待ち続けて年を経た女の像が結ばれることとなると考察している。⁶⁾

第二章 さまざまな伝承（物語）

「はじめに」で述べたとおり、「橋姫伝承」はいくつかの『古今和歌集』注釈書に見られる。

藤原清輔『奥義抄』

（一一三五—一四四年成立）
さむしろに衣かたしき今夜もや我を待らんうちのは
しひめ

此哥は橋姫の物語といふ物にあり、昔妻ふたりもたりける男、もとのめのつはりして七磯の和布をねかひけるものとめに海へにゆきて竜王にとられてうせにけるを、ものめ尋ねありきけるほとに、浜へなる庵にやとりたりける夜、をのつから此男にあひにけり、此哥をうたひてうみへより来れりける也、さて事のあり様いひて明れはうせぬ、此め泣々歸りにけり、今の妻此事をきゝて、はじめのことくゆきて此男をまつに、此哥をうたひてきければ、我をは思ひすてゝもとのめをこふるにこそとねたく思ひて、男にとりかゝりたりければ、男も家も雪などの

消ることくにうせにけり。世のふる物語なれはくはしく
かゝす、集云、

ちはやぶるうちの橋姫なれをしそあはれと思へ年の
へぬれと

とあり、是を此事を思てよめるにこそ、かのおともとの
めをしたひたる物なれば、年ころなりける人などを橋
ひめによそへて読るとそみゆ、⁽⁶⁰⁾ ちはやぶるとはかのお
とこ女のむかしの世のことなれば、神にて侍けるにこそ
は、又よろつの物にはそのものをまもる神あり、いはゆ
るたましゐなり、されは橋を守る神をは橋姫とはいふと
も心得られたり、神はふるき物なれば、年へたる人によ
そへたるにや、宇治の橋姫とさしたるそ心えぬ、神をひ
め、もりなといふ事つねの事也、さほ姫、たつた姫、山
姫、嶋もり、是等みな神也、

顕昭「古今秘注」(『顕注密勘』による)

(一一八三丁一一八四年年成立)

さむしろに衣かたしきこよひもや我をこふらむつぢ

のはし姫

宇治の橋姫とは姫大明神とて、宇治の橋の下におはする
神也。其御許へ宇治橋の北におはする離宮と申神、夜こ
とに通給ふとて、暁ごとに宇治川の浪のおびたゞしく浪
のたつおとのするとなん、彼辺に侍し土民等申侍し。而
隆縁伯耆と申歌よみは、(中略)此歌の事尋侍しかば、
住吉の明神の宇治橋姫と申、其神のもとへかよひたまふ
あひだの歌也。又此集云、

ちはやぶる宇治のはしひめなれをしそあはれにおも
ふとしのへぬれば

院御本には、宇治の橋もりとあり。此事を思合るに、宇
治土民は、離宮の橋の辺の^下姫大明神にかよひ給と申、隆
縁は住吉の大明神宇治の橋守の神に通給と申き。いかさ
まにも宇治橋姫は一定なり。共此二首が心に相叶へり。
又六帖、家持歌云、

(家持歌、略)

奥義抄には橋姫物語と云古物を^(語説)ひきて釈せられたれど、
彼物語にも、このちはやぶる宇治のはしひめなれをしそ
の歌をかきて、年ころなりけるひとなどを橋姫によそへ
てよめるとぞみゆる。ちはやぶるとは、かの男むかしの

世の事なれば神にて侍りけるにこそ。又よろづの物には其物を守る神こそ、所謂たましひなれ。されば橋を守る神をば橋姫とはいふとも心えられたり。神はふるき物なれば年へたるによそへたるにや。宇治の橋姫とさしたるぞ心えぬとかきたれば、是は極て不定也。たしかなる證文はなけれど、宇治の橋姫は一定なれば、宇治の橋下の姫大明神の事にて侍べしとぞ思い給へる。

橋姫物語云、昔妻二人もたりける男、本妻のつはりして、(中略) 男も家も雪などのきゆるが如に失にけり。世の古物語なれば委不_レ可_二書集_一。年のへぬればとあり。これも此事を思てよめるにこそと云々。今案に、物語つくるには、さもことよりたる歌を本としてつくりても、其歌を記載する常事也。このちはやぶる宇治の橋姫の歌にて、其歌を書て橋姫の物語と名づけたる歟。(以上、顯昭『袖中抄』にも同様の記あり)

(藤原定家加注)

此歌又分明。先人幼稚之時、橋姫といひし物語をめのとよみてきかせしかば、あはれとおぼえて落涙、成人の後見ばやと思に、其物語不_レ尋得_一。其に此歌はあり

し也と被_レ申き。但、如此注_一ふるき物語は只歌に付て、古歌を今歌によまする、定まりたる事也。不_レ可_二用_レ之_一。

堯患『古今集延五記』

(一四九二年成立)

一さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむうちのはしひめ

此哥八昔旧妻新妻持タル男ノ其旧妻ツワリニ七浦ノ和メ布ヲネカヒシカハ男尋アリクトテ竜王ニトラレ又、旧妻又其跡ヲ尋ニ瀆ノホトリニ家有テ沖ヨリ此哥ヲウチウタヒテ、其夜契ヲカハス、アクレ八家モ男モ消テナシ、其ヲ婦テ新妻ニ語シカハ新妻又行テミルニキ、シ如ク家有テ男又此哥ヲウタヒテ来ル、新妻我ヲ八思ハスヤトテ男ニ取付ケレハ即家モ男モ消テ無ト也、此旧妻今ノ宇治ノ橋姫ナルヘシ、即橋ノツメニオハスル神也、彼ノ河ノ北ナル離宮トテオハス其神暁コトニ通ヒ玉フ時八河浪アラク立侍ルトカノ里人ノ云伝ヘタル説也、或八住吉明神ノ通ヒ玉フトモ云リ、定家云(中略)ト也、又注二(中略)

其男ノ哥ニテモアラサル事モヤ侍ラン、其ヲ八只カノ男
ノヨメリト心得テアリナント也、

『毘沙門堂本古今集注』

(鎌倉時代末―南北朝期成立)

思ニ八忍フル事ソマケニケル色ニハイテシト思ヒシ物ソ
(中略)山城国風土記云、宇治ノ橋姫七尋ノ和布ヲツハ
リニ願ケル程ニ、オトコ海辺ニ尋ネ行テ笛ヲ吹ケルニ龍
神メテ、[△]聲ニトレリ、姫夫ヲ尋テ海ノハタニ行ケルニ
老女ノ家アルニ行テ問程ニ、サル人ハ龍神ノ聲ニ成テオ
ハスルカ、龍宮ノ火ヲイミテ此ニテ物ヲ食スルナリ、ソ
ノ時ニミヨト云ケレハ、カクレ居テ見之ニ龍王ノ玉ノ輿
ニカ、レテ来テ供御ヲ食シケリ、サテ女物語シテナク
〈別レケリ。遂ニ八カヘリテ彼女ニツレタリト云リ、

以上を四つのパターンに分類してみる。

パターン

○男の帰りを待つ女に対し、男は慰めとして「さむしろに」

詠を送り異界に去っていった。

二人の妻を持った男が、竜宮などの異界に連れ去られる。

はじめの妻は男を探しに行き、浜辺の庵で再会する。この

時に男は妻をいたわり「さむしろに」詠を送り夜明けとと

ちに消えていった。(『奥義抄』『古今集延五記』)

【考察】注釈書のなかでは単独の伝承(物語)としては

なく、次のパターン の前段として語られている。『奥義

抄』『古今集延五記』における、はじめの妻についてのス

トーリーパターンである。

パターン

○別の女を想い歌を詠む男に嫉妬した女は、二度と男の姿を

目にすることができなかった。

二人の妻を持った男が、竜宮などの異界に連れ去られる。

はじめの妻は、男を探しに行き浜辺の庵で再会する。この

時に男ははじめの妻をいたわり「さむしろに」詠を送り、

夜明けとともに消えていった。その後、新しい妻も会いに

行ったが、男が「さむしろに」と詠むのを聞き、はじめの

妻に向けての歌と思ひ嫉妬して男に掴みかかって怒ったた

め、男も家も消えてしまった。(『奥義抄』『古今集延五記』)
 【考察】嫉妬した女は男から何も得られなかったという、男を失った哀れな女を蔑む男性目線の物語である。北川忠彦氏は、はやく『奥義抄』にみられる、この嫉妬する女という主題が、のちに『剣巻』・謡曲『橋姫』・御伽草子『橋姫物語』などの鬼女としての橋姫に展開していったと述べている。

パターン

○対岸に坐す男神に寄り添うことのできなかった女神が、後代に橋の守護神になった。

女神(橋姫)は対岸の離宮(宇治神社)の男神を迎え入れる。暁とともに帰っていく男神に寄り添うことのできないことを嘆き、後代に橋が渡されるに及び昇華して橋の守護神となった。(『古今秘注』所引「宇治土民」伝)

【考察】男に寄り添い通すことができなかった女という点でパターンと共通するストーリーではある。しかし、人としての男女のかかわりを述べるストーリーではなく男女の神の物語であるので、「さむしろ」に「詠との関係は二次

的なものであり、むしろ「ちはやぶる宇治のはしひめ」詠注釈の中で引つ張り出された伝承である。この歌は男神が女神に贈った歌というより、後代にこの話を聞いた人(第三者)が、女神の身の上に寄り添って詠んだ歌ということになる。同じく顕昭の『袖中抄』では、この歌をして「彼神此歌を讀給はずとも、さ様事を思て世の人詠ぜんも同事也」と評しているように、「今」の世にいる「宇治土民」が、橋姫(橋守)大明神すなわち「ちはやぶる宇治のはしひめ」について語り、「なれをしぞあはれ」に思っているのである(前掲『古今集延五記』傍線部参照)。

パターン

○宇治に暮らす女が戻ってこない男を探し求めて再会するが、男は異界に去り、女は再会の地に佇み続けた。

夫が妻のためにわかめを取りに行つたまま、竜宮に連れ去られてしまう。妻は海辺に住む老女に「その人は竜宮の火を熄んでここで食事をするから、その折に見よ」と言われ、老女の手引きで夫と一度だけ再会する機会を得る。その後は老女のもとで過ごした。(『毘沙門堂本古今集注』所引

「山城国風土記」)

【考察】パターン と内容は似ているが、ここでは「海ノハタ(端)」「海辺」に住む老女の手引きで一度だけ女(宇治の橋姫) は男と語り交わす機会を得て別れたのち、「彼女(老女) ニツレタリ」とある。これより女もまた老女として海辺で余生を過ごしたととらえられよう。つまり最後まで話の舞台は宇治に戻らない点に特徴がある。

パターン くのいずれもが宇治の橋姫のいわれとして説き始めてはいるが、 を除き各々のストーリー自体の舞台は必ずしも宇治でなくとも、何処であれ設定可能な話である。物語形成の論理上の順序としては、「さむしろに」 詠 の順となると考える。

「さむしろに」 詠と各物語(伝承)との関係を中心に考えた場合、 は第一章で述べた宇治橋を守護する女神と特定されるから、これを論理上の原初であるともみなすことができる。「顕注密勸」藤原定家加注では、顕昭が言うように元来の橋姫物語(「古物語」)は「ちはやぶる宇治の橋守(橋姫)」「詠に即して宇治大明神(宇治の橋守=宇治の橋姫)」について語

る古物語であったはずであるとして、今は見られなくなっているその古物語に「さむしろに」詠が載っていたと記憶すると述べた定家父の言について、それはあり得ないことと断じている。

とは、男が待つ女を思いやって歌を詠むという点において「さむしろに」詠の存在を前提にしている。両者の順序は【考察】で述べたとおり、が の前提となっていることは明らかである。

は「山城国風土記」を出典としているが、ここにいう風土記は、「宇治ノ橋姫」を話の発端に据えていることからしていわゆる古風土記とは別の後代の書である。前述したとおり最後まで話の舞台が宇治に戻らず、現に祀られている宇治の橋姫の存在理由の説明ではない話を記している。また「さむしろに」詠は登場してこない。男を竜神に取られてしまうというこの話について、北川忠彦氏は「もともと橋姫とは関係のない、たんなる水辺の夫婦の物語」であるとし、水に縁ある営みを紡いでいた宇治の里人の物語としての「痕跡」を見ている。「宇治ノ橋姫」を話の発端に設定してはいるが、宇治橋に橋姫が祀られる以前の物語であるかにとらえうる。

第三章 宇治十帖における橋姫

藤居貞和氏は『橋姫伝承』といった伝統文学を「宇治十帖」の「棹」としてみた場合、橋姫としての大君像の設定が物語の構造としてであると表明している。⁷⁾しかし、すでに北川忠彦氏が明察したとおり、「宇治十帖」において直接「橋姫」と呼び掛けられるのは大君だけでなく中の君も同様である。また薫君に「衣かたしき今宵もや」と口ずさませ、匂宮に「かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつる」と思わせる浮舟（後掲の浮舟帖所引傍線部）も橋姫としての性質を持つていると考えられる。ここでは、三人それぞれの橋姫像と橋姫伝承の関りを見ていきたい。

（『源氏物語』の引用と訳は、『新編日本古典文学全集』小学館による）

第一節 大君の場合

薫君は都から離れた宇治に暮らす大君を思い、従者の語る網代漁の様子に宇治川の情景を思い浮かべ、歌を詠む。

橋姫の心を汲みて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬ
る

ながめたまふらむかし

宇治の橋君のお気持をお察して、浅瀬をゆく棹のしづくに舟人が袖を濡らすように、私も涙で袖が濡れてしまいました。

さぞや物思いに沈んでいらっしやいましょう。

これに大君は次のように返す。

さしかへる宇治の川長朝夕のしづくや袖をくたしは
つらむ

身さへ浮きて

棹さしかえては行ったり来たりする宇治の渡し守は、朝夕の棹のしづくが袖を朽ちさせてしまつのでしょ。

私の袖も涙に朽ち果てることでしょう。

私の身さえも涙で浮くばかりでございます。

「橋姫 一四九〜一五〇頁」

二人の関係は薫君が大君を待つ女として「橋姫」に例える

ところからスタートしていると考えらえる。また薫君が後に亡くなった大君を「わが心乱りたまひける橋姫かな」と回想していることから分かるように、薫君は大君を橋姫に擬えている。「父（八宮）の帰りを待ち続ける娘」である大君に薫君は「橋姫伝承」を想い重ねて「男の訪れを待つ女」である「橋姫」に譬えて歌を詠む。これによって、大君は橋姫伝承（物語）の主人公としての性格を持つことになる。また後に出家を志願し、いわば「聖」となるうとした大君は「古今和歌集」以来最も始原的な「橋姫」＝橋を守る美しい「女神」として薫君に捉えられているという指摘がされている⁵⁾。これよりすれば、薫君に寄り添うことのないままに、宇治に佇み続けたという点において、パターン の女神に近い。

大君は薫君からの求愛に心揺れつつも、妹の後見として結婚を見守るために自身の結婚は諦め一生を過ごそうと決意する。宮家の女主人として妹を後見しようとした大君だったが、薫君を妹中の君の婿にという思惑通りには事が進まず、敬遠していた匂宮を中の君の婿として迎えることになってしまった。中の君と匂宮の結婚をきっかけに大君は妹の未来に悲観的な想像を膨らませ、心身共に病んでいく。薫君は大君を晴

れやかならぬ場所、宇治に隠れ住む女としていたわり、大君を「待つ女」ととらえている。これは「橋姫伝承」のパターンに置き換えるとパターン の男の心情と一致しているのではないだろうか。対して大君は、妹である中の君のこの先は不幸や年老いていく自身の今後への不安を持っている。結婚することなく宇治で生涯を終えた大君は、死後も宇治川で幸せを待ち続ける橋姫になったといえるだろう。これはパターンの相似形ともいえる。

第二節 中の君の場合

中の君は、匂宮の訪問により新婚第三夜を迎える。その翌朝、二人で宇治川を眺めながら匂宮は中の君に対して

中絶えむものならなくに橋姫のかたしく袖や夜半に
ぬらさん

私たちの仲は絶えるはずもないけれども、あなたは宇治の橋姫のように独り寝の衣を片敷いて涙に袖を濡らされる夜もありでしょう。おいたわしいことです。

と、歌を詠む。この歌の上句は『古今和歌集』の「わすらるる」詠を引歌としている。同詠の「中絶えて」には、宇治橋が架設後にしばしば切れたことから、橋の中間が切れる意が掛けられているが、句宮の歌において中の君は「橋姫」に例えられ、「中絶えむものならなくに」（私たちの仲は絶えることはない）と歌われている。

宇治橋は大化二年（六四六）に道登、道昭によって創建されたが、『延喜式』『雑式』によれば、「宇治橋敷板」が毎年諸国に宛て課されており、大水や台風などの被害により絶えず修理の必要があったらしい。⁹⁾『帝王編年記』弘安九年（一二八六）十月十八日条には、宇治橋創建以来この年までに橋は七回造営されたと記されている。これらの史実により宇治橋には「中絶え」のイメージが持たれ、和歌の世界では恋の途絶えを歌うときに宇治橋が用いられてきた。

句宮の「橋姫」という問いかけに、

絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき

絶えることはあるまいとのお約束をあてにして、あの

宇治橋ではありませんが、長い絶え間をお待ちしなければならぬのでしょうか。今から途絶えなどをあつしやるのが悲しゅうございます。

〔総角 二八四―二八五頁〕

と、中の君は宇治橋が長いように自分も句宮を永く待たなくてはいけないのかと「待つ女」として返信している。宇治橋の長さは江戸時代のことではあるが八十三間四尺（約一五〇メートル）と記録にあり、¹⁰⁾『源氏物語』でも「宇治橋のはるばると見わたさるるに」（浮舟 一四五頁）、「宇治橋のいともの古りて見えわたさるなど」（総角 二八二頁）と表現され、宇治橋が長く、かつ永い時を経てきたことを表している。「宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき」とは、「逢瀬を取り持つ宇治橋がはるか遠い向こうから渡し来られるかのような二人の仲ですから、ずっとあなたをお待ちし続けなければならぬのでしょうか」の心持ちである。この時点で中の君は「宇治の橋姫」としての性質を持つことになったといえるだろう。中の君はその後、大君の死の翌春に二条院に引き取られることになる。

ここで「宇治の橋姫」が宇治をはなれ二条院に居続けるこ

となる。薫君からひととき思いを寄せられもするが結ばれることなく過ぎていった二条院における中の君の行末を、

『古今和歌集』注釈書におけるパターン の橋姫（「さむしろに」詠と関係しない物語）に沿わせてみた場合、宇治から来た女が出会い、男と会う手引きをしてくれたのちに女が身を寄せ続けたという老女になぞらえて、中の君を宇治から京の二条院に迎える許可を下した明石の中宮の役割を読み解くこともできよう。

第三節 浮舟の場合

浮舟も中の君と同様「宇治橋」を用いて恋の不安を表現した。浮舟の歌に最初に「宇治橋」が登場するのは薫君と初めて交わした贈答歌である。

宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心
さわくな

いま見たまひてん

宇治橋のように未長い二人の契りは朽ち絶えることは

あるまいから、不安に思いい心配することはないのです。

わたしの気持ちは今におわかりになりましょう。

絶え間のみ世にはあやぶき宇治橋を朽ちせぬものと
なほたのめとや

絶え間ばかりが多くて危ない宇治橋、そのような不安な仲ですのに、やはり朽ち絶えるものがないものと思つて頼りにせよとおっしゃるのでしょうか。

「浮舟 一四五―一四六頁」

薫君は宇治橋の長さに例えて自らの永遠の愛を誓つが、浮舟は宇治橋の絶え間を踏まえて恋の不安定さを歌い、実際は途絶えてばかりの不誠実な薫君の愛に対する不安を投げかけている。ここで浮舟は『古今和歌集』「わすらるる」詠の男に顧みられない絶望感を踏まえることで、薫君の絶え間の多さからの二人の仲への不安を訴えていると考えられる。ここで薫君は浮舟の不安を理解しておらず浮舟のことを、自らを「待つ女」とだけとらえているとみられる。

都に帰つた後も薫君は浮舟を忘れられない。

大将、人にものたまはむとて、すこし端近く出でたま

へるに、雪のやうやう積もるが星の光におほおほしきを、
 「闇はあやなし」とおぼゆる匂ひありさまにて、「衣かた
 しき今宵もや」とうち誦したまへるも、はかなきことを
 口ずさびにのたまへるもあやしくあはれなる気色そへる
 人さまにて、いともの深げなり。言しもこそあれ、宮は
 寝たるやうにて御心騒ぐ。おろかには思はぬめりかし、
 かたく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なる
 もあはれなり、わびしくもあるかな、かばかりなる本つ
 人をおきて、わが方にまさる思いはいかでつくべきぞ、
 とねたう思さる。

大將がどなたかになんぞ仰せになろうとして少し端近く
 に出ていらつしやると、雪のしだいに積つてゆくのが、
 星の光にうつすらとみえているなかで、「闇はあやなし」
 さながらの香りを思わせるような御身の薫り、風情で、
 「衣かたしき今宵もや」と吟誦していらつしやるのもこ
 うしたなんでもない一ふしをお口ずさみになるのにも不
 思議にしみじみとした風情の備わっているお人柄である
 から、なんとなくじつに奥ゆかしい感じである。ほかに
 いくらでも歌はあるだるつに、宮は寝たふりをしながら、

お心が波立っている。「あの宇治の女に対していいかげん
 な気持ではないようだ。寂しい一人寝に思いを馳せて
 いるのはこの自分だけだろつという気がしていたのに、
 大將が同じ気持ちであるのも胸がつまる。なんとつらい
 ことよ。これほど情の深いものと男をさしおいて、この
 自分のほうに思いを寄せてくれるはずがありえようか」
 と、いまいまいしくお思いになる。

「浮舟 一四六〜一四八頁」

ここでは薫君により浮舟が「宇治の橋姫」ととらえられる
 ことよつて、匂宮の焦りを駆り立てさらに物語が展開して
 いく。薫君は宮中で作文会・管弦の宴の後「衣かたしき今宵
 もや」と吟唱する。これに薫君の浮舟への恋心への本気さを
 感じ、焦りを持った匂宮は、橘の小島の隠れ家に浮舟を連れ
 出す。

浮舟は最初大君、中の君と同じく「待つ女」として登場し
 ている。しかし浮舟の場合、一人の男を待つ女ではなく薫君
 匂宮二人を待つ女である。どちらも選ぶことのできない浮舟
 は次第に追い詰められ、結果入水することになる。浮舟は
 「待つ女」であることを自ら放棄する。これは古伝承にはな

い独自のパターンである。

しかし、句宮の側に立つて、男女の立場を置き換えて『古今和歌集』注釈書のパターンと照らし合わせると、浮舟と句宮の物語はパターンを彷彿とさせる。薫君が「さむしろに」詠を口ずさむのに嫉妬した句宮（注釈書の新しい妻にあてることのできる）は二度と入水した（異界に連れ去られた）浮舟（注釈書では男）に会うことができなかつたのである。

さらにここで、浮舟が入水したことの、「橋姫」伝承（物語）との関りを考えてみたい。桑原博史氏は、『奥義抄』にいう「橋姫の物語」の原初形態として、『山城名勝志』所引「古今為家抄」所載の、「土人」伝承（後段）に注目した。¹¹

古今為家抄云、宇治の橋姫といふ事、嵯峨天皇の御とき有女依嫉妬夫二被_レ棄てける、（中略）我成_テ鬼神_ニ我夫の今の妻をとらむとちかひて水をた_ゞき水神にちかひければ百夜に満するとき則_レ成_レ鬼今女ヲ取けり、仍此鬼を土人_{コト}に祝といへり、又云橋守明神ともいへり、又（土人）云昔宇治川の辺に夫婦すみけるが男龍宮へ財もとめ

んとて行て不返けるを、女恋悲しみて於_テ彼橋辺_ニ死て成_レ神、仍曰_ク橋守明神_トといへり、

後段の伝承について氏は、形態的内容的に見て素朴単純で、かなり古い時代の伝承のおもかけを伝えているのではないかとされ、この伝承の基底に、「宇治の地の漁業生活における水死事件」を想定している。¹⁰ 桑原氏によれば、宇治の地には古くから渡船業・漁業を生業とする人々が住み着いており、そうした人々は水神を信仰するとともに、人によつては、水に関係するところから橋姫をも祭祀していた。「男竜宮へ財もとめんとて行て不返ける」とは、生活の糧を得るために漁に出た男の水死を想像化したもので、人々は残された妻の悲しみに対する同情の気持ちから、妻の行動を自分たちの信仰する橋姫と結び付け、一つの信仰を生み出すに至つたとされているのである。

桑原氏の説どおり、「橋姫伝承」（物語）の原初に「宇治の地の漁業生活における水死事件」を想定してよいとするなら、浮舟のつた宇治川への入水という行為は、「橋姫」伝承（物語）における、異界への連れ去りという点で共通し、宇治の地からの決別としての象徴的な意味を持つだろう。

橋姫伝承（物語）は原初形態の伝承のおもかげを伝えていることが濃厚であることが、浮舟の入水¹¹異界への連れ去りという点で考えられる。「源氏物語」における「宇治の橋姫物語」はここで終結する。自死を果たせなかつた浮舟は宇治を離れ出家し、小野で別の物語を繰り広げるからである。

大君、中の君、浮舟は姉妹でありながら、それぞれの人生の在り方や結末は全く異なる。しかし、都に住む薫君や匂宮にとって八宮の姫君たちは、皆例外なく宇治という異界の水辺で自分たちの訪れを「待つ女」、橋姫と位置付けられていると考える。「橋姫」伝承（物語）との関連性に着目した場合、最も古伝承に近い「宇治の女神」、そして「古今和歌集」における「待つ女」のイメージを踏襲しているのは大君であろう。

中の君は匂宮の訪問の絶え間を宇治橋の長さに例え、浮舟は薫君が誓う愛の長さへの不安を宇治橋の絶え間と例えた。二人は共に宇治橋を不安定なものとして捉えており、そこに男女の関係の脆さをみているのではないだろうか。前述した薫君と浮舟の「宇治橋の」「絶え間のみ」贈答歌における二

人のすれ違いのように、男女互いの理解できないすれ違いへの象徴として「さむしろに」詠は宇治十帖において、ちりばめられているのではないかと考察する。

おわりに

ここまで「源氏物語」宇治十帖における三姉妹（大君、中の君、浮舟）の描かれ様を「橋姫」伝承（物語）とのかかわりの中で見てきた。

『源氏物語』作者の生きた時代に橋姫伝承（物語）がどのような物語として人々に語られていたのか直接にはわからないとはじめに述べた。しかし、浮舟の入水¹¹異界への連れ去りと捉えた場合、「源氏物語」作者は「橋姫伝承」（物語）の原初に「宇治の地の漁業生活における水死事件」があることを知っていたのではないかと思われる。これらから、現在では見当たらない『源氏物語』作者の時代までさかのぼる、「古今和歌集」以前の「橋姫」像を示した文献には、原初形態にきわめて近い形の「橋姫伝承」（物語）が残されていた可能性が考えられる。

橋姫伝承（物語）といった伝承文学を「宇治十帖」の枠としてみた場合、宇治の三姉妹それぞれに、『古今和歌集』三首およびその注釈書が示す宇治橋架橋をさかのぼる時代からの橋姫伝承（物語）の残映を、パターンを除きすべて確認した。注釈書が書かれた時代は「源氏物語」の成立からなるか後代であり、それぞれの注釈書が成立した時代も様々である。「源氏物語」作者は、宇治の三姉妹に孤独の女神を添わせることはあっても哀れな鬼女を重ねたりはしない。ただ鬼女への変化の芽生えは、『奥儀抄』にパターンとして十二世紀前半には登場していた。嫉妬というキーワードに即し男女の立場を入れ替えてみれば、「もとつ人」（もとの男）薫君に嫉妬し浮舟を失うに至った句宮は、パターンにおける「もとのめ（女）」に嫉妬した「今の妻」そのものである。橋姫像は時代に從って変換していくというよりも、原初以来のおもかげをも含めた複数のパターンの橋姫像が、古代より中世に至るまで歴史を通じて繰り返し、あるいは入れ替わりつつ継承されてきたのである。

注

- (1) 伊藤千世「橋姫物語」の古体性」愛知淑徳大学国語国文一六号、一九九三年、九一～一〇五頁。
- (2) 北川忠彦「王朝の文学と宇治」宇治市史1 古代の歴史と景観 第三章第四節 宇治市役所、一九七三年（以下、本稿における北川氏論考への言及はすべてこれを指す）、五一八～五四〇頁。
- (3) 渡瀬淳子「剣巻」の「創作」態度 宇治の橋姫を巡って」『学術研究 国語・国文学編』（早稲田大学教育学部）五四号、二〇〇五年、一三頁～二四頁。
- (4) 原田敦子『古代伝承と王朝文学』和泉書院、一九九八年、一五八～一五九年。
- (5) 柳田國男「橋姫」（「一目小僧その他」所収）『定本柳田國男集第五卷』（新装版）筑摩書房、一九六八年（「橋姫」初出は一九一八年）。
- (6) 前注（4）原田論文。
- (7) 藤井貞和「会話、消息の、人称 体系」『物語研究』二号、二〇〇二年、二八頁。藤井氏が論文の中で橋姫として設定し取り挙げている人物としては大君のみである。
- (8) 糸賀きみ江「宇治の橋姫」『受容考』『青山語文』二六号、一九九六年、七三頁。
- (9) 下中邦彦編『日本歴史地名大系第二六巻 京都府の地名』平凡社、一九八一年、平凡社「宇治橋」の項。
- (10) 前注（9）「宇治橋」の項所引「上林家前代記録」。

(11) 桑原博史「宇治の橋姫伝説と橋姫物語」『国語と国文学』三六巻六号、一九五九年。なお、「古今為家抄」は、南北朝期頃の偽書であろうとされている(前注(3)「渡瀬論文」)。宇治の橋姫を鬼女と説く説の方を中心に述べており、しかも鬼女となるのが後の妻ではなく先の妻へと入れ替わっていることよりして、藤原定家息男為家の時代の著でないことは確かと思われる。

引用古典文学作品等典拠一覧(掲出順)

・『古今和歌集』

小沢正夫・松田成穂『新日本古典文学全集11 古今和歌集』小学館、一九九四年。

・『奥義抄』

蔵中さやか・黒田彰子・中村文編『奥義抄古鈔本集成』和泉書院、二〇二〇年所収大東急記念文庫蔵本。本文表記『奥義抄』の成立年は、佐佐木信綱『日本歌学大系第壹巻』風間書房、一九五七年 解題(久曾神昇執筆)によった。

・『顯注密勅』

久曾神昇『日本歌学全集別巻5』風間書房、一九八一年。成立年は同書解題によった。

・『古今集延五記』

秋山一枝・田辺佳代『古今集延五記(天理図書館蔵)』笠間書院、一九七八年。成立年は同書解題によった。

・『毘沙門堂本古今集注』

片桐洋一『毘沙門堂本古今集注』八木書店、一九九八年。成立年は同書解題によった。

・『袖中抄』

久曾神昇『日本歌学全集別巻2』風間書房、一九五八年。

・『源氏物語』

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集24 源氏物語』小学館、一九九七年。

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集25 源氏物語』小学館、一九九八年。

・『帝王編年記』

『新訂増補国史大系12 扶桑略記・帝王編年記』吉川弘文館、一九九八年。

・『山城名勝志』

新修京都叢書刊行会『新修京都叢書一四巻 山城名勝志』坤臨川書店、一九七一年。

参考文献(著書・論文等)一覧(五十首順)

磯部一美『源氏物語「宇治」の女たち』『愛知淑徳大学論集 文学部・文学研究科篇』二六号、二〇〇二年。
伊藤千世『橋姫物語の古体性』『愛知淑徳大学国語国文』一六号、一九九三年。

上原作和『人物で読む源氏物語 大君・中の君』勉誠出版、二〇〇六年。

上原作和『人物で読む源氏物語 浮舟』勉誠出版、二〇〇六年。

- 北川忠彦「王朝の文学と宇治」『宇治市史1 古代の歴史と景観』
 第三章第四節 宇治市役所、一九七三年、
- 桑原博史「宇治の橋姫伝説と橋姫物語」『国語と国文学』三六卷
 六号、一九五九年。
- 下中邦彦編『日本歴史地名大系第二六卷 京都府の地名』平凡社、
 一九八一年。
- 原田敦子『古代伝承と王朝文学』和泉書院、一九九八年。
- 藤井貞和「会話、消息の、人称 体系」『物語研究』二号、二〇
 〇二年。
- 柳田國男『定本柳田國男集第五卷』（新装版）筑摩書房、一九六
 八年。
- 渡瀬淳子「『剣巻』の「創作」態度 宇治の橋姫を巡って」『学
 術研究 国語・国文学編』（早稲田大学教育学部）五四号、二
 〇〇五年。

（中京大学文学部在学学生）